

イギリス小説と批評の研究

原 英 一

2014年度に国内で出版された20数冊の書籍を通読した結果を、以下に紹介する。昨年度もれていたものも含まれる。遺漏があるかもしれないので、ご指摘いただきたい。

単著では、北村富治『「ユリシーズ」大全』（慧文社、2014.9）が質量ともに圧倒的である。B5判で800ページ超、この大規模な注釈書は、ジョイスの大作に取り組むための必携書となるだろう。丸谷才一訳を厳しく批判した『「ユリシーズ」註解』（洋泉社、2009）の増補版であり、続編である。「ジョイスが不敵にも読者に向かって、『ユリシーズ』に埋め込んでおいた謎々や判じ物を解くことができるのかと挑戦するのであれば、受けて立とうではないか」（「まえがき」）と決意した北村氏、なんと驚いたことに、「サラリーマンとしての半生」（「あとがき」）を過ごしたという。銀行に勤務し、長期の海外駐在の間に、『ユリシーズ』研究に打ち込んだ。その研究手法はビジネスマンらしい徹底的な現場主義であるが、ジョイスへの情熱に裏付けられた執拗な探求ぶりには驚嘆するほかはない。ダブリン市内を何度も歩き回って、ブルームの足跡を実際にたどる、大英図書館だけでは足りず、エルサレムにまで出かける、日露戦争時の潜水艇について防衛庁防衛研究所の資料を調べる——大学で不毛な雑務に追われている並の研究者にはなかなかできないようなリサーチの徹底ぶり。国際ビジネス畑を歩いてきたからこそ、こんなことができたのだろう、羨望を禁じ得ない。

荒木映子『ナイチンゲールの末裔たち——〈看護〉から読みなおす第一次世界大戦』（岩波書店、2014.12）は、タイトルが示す通り、〈看護〉をテーマとしたものである。しかし、二〇世紀英文学を読む者にとって、実に多くの示唆に富み、新しい発見と驚きに満ちている。モダニズム文学史の書き換えを促されるのだ。イギリスでは「大戦」といえば、第二次大戦ではなく、第一次大戦を指すことが普通である。それがなぜなのか、イギリスが第一次大戦では第二次大戦の二倍の死者を出していたことを知ると、腑に落ちる。しかし、本書の関心領域は、グレイヴズやサースンなど「戦争文学のキャンオン」とは、明確に一線を画す。エリートではなく、忘れられてきた人々、植民地から招集された兵士、銃後で単純労働を担った中国人労働者、そして医師や看護師、担架兵などが経験した大戦の記憶が、歴史の闇から救い上げられる。戦場の凄惨な現場を直接に体験した看護師たちの、迫力に満ちた体験記が論じられるのだ。文学史的に注目すべきは、ヴェラ・ブリテン『青春の遺言書』（1933）、エレン・ラ・モット『戦争の引き波——アメリカ人看護師が目撃した戦場の人間の残骸』（1916）、メアリー・

回顧と展望

ボーデン『禁じられた地帯』(1929)といった体験記が、モダニズム文学の淵源として捉えられうることである。二〇世紀文学史は書きかえられなければならない。

阿部公彦『英語的思考を読む——英語文章読本 II』(研究社, 2014.5)は、批評や研究とは少し違うが、意義深い書物だ。阿部氏は「今、読解力が危機です」と切り出す。「読んで考えるということをしなない人」が増えているというのだ。大学教育の現場にいる人間として、全く同感である。このような危機と対峙して、阿部氏は、読んで思考することがいかに大切であるか、いかに実りあるものであるかを、本書での「読み」の実演を通して証明してみせる。英語や英語文化を「おもしろがる」ための素材として、ワイルドの「幸福な王子」から『ヨブ記』までを取り上げ、さりげなく淡々と、しかし奥深く読み込んでいく。阿部氏が読み取ろうとするのは「英語的思考」だ。そのため、原文と訳文とが頻繁に引用される。英文和訳なんか無意味だ、英語の文章はざっくりと中身が分かれば、それでいいのさ、というのが現在の大学での「英語読解」教育の主流になっている。「英語的思考」など軽蔑されているのだ。読んで思考することの意義を繰り返し証明する本書は、このような「いい加減な英語読解教育」が必然的に帰結する寒々とした知的貧困を思い知らせてくれる。「英語読解」の授業で、必読の副読本としたい。

原田範行『風刺文学の白眉『ガリバー旅行記』とその時代』(NHK 出版, 2015.1)は、NHK カルチャーラジオのテキスト。一般の聴取者・読者向けに書かれているものだが、なかなかどうして重厚な内容だ。一昨年、『『ガリヴァー旅行記』徹底注釈』(岩波書店)をものした著者だけに、時代や社会の背景を深く掘り下げつつ、『ガリヴァー』の面白さを十分に味わわせてくれる。語り口の巧さと柔軟な思考、そして何よりも内容の濃さが、本書を一般読者にも専門家にも、読んで楽しめる、読んで損のないものに仕立て上げている。

佐々井啓『ヴィクトリアン・ダンディ——オスカー・ワイルドの服飾観と「新しい女」』(勁草書房, 2015.2)は、服飾学を専門とする著者が、ワイルド文学の服飾を中心に検討して、ヴィクトリア朝末期の社会と服飾表現との関係を追求めたもの。服飾は、小説研究で重要なものであることは誰もが認識していながら、ほとんど無視されてきたテーマである。服飾に執着があったワイルドの文学の解釈には、この面での検討が欠かせない。佐々井氏の論考は、服飾に焦点をあてたユニークなもので、ワイルド以外でも、「新しい女」をテーマとする芝居の分析等、新しい発見と刺激に満ちている。

近藤康裕『読むことの系譜学——ロレンス、ウィリアムズ、レッシング、ファウルズ』(港の人, 2014.10)は、D.H. ロレンスとレイモンド・ウィリアムズを起点としていることから分かるように、近代資本主義社会が抱える問題を、文学あるいは文化研究がいかに表現し、批判的に追求してきたかを論じる、きわめて「政治的な」文化研究である。ロレンスとその後に続く、レッシングやファウルズとの関係は、「読むこと

イギリス小説と批評の研究

の系譜学」として捉えられる。著者は「生」、「歴史」、「価値」、「関係」、「連続と断絶」といった概念を、ロレンス、ファウルズ、レッシングのテキストを精緻に読み解きつつ追求する。そこには、F.R. リーヴィスとウィリアムズの批評行為が交錯し、スリリングな議論が縦横に展開されている。

川崎明子『ブロンテ小説における病いと看護』（春風社、2015.2）は、ブロンテ三姉妹の小説における「病い」及び「看護」と、小説という「語り」とのダイナミックな相互作用を詳細に分析したもの。当時の現実の「病い」、それに対処する医学、さらに看護の状況についての精密なリサーチによって基盤を構築し、ブロンテ小説のプロット中にさまざまに表れる「語り」としての「病い」が検討される。本書は、著者がハル大学に提出した博士論文を日本語訳して、加筆修正したものだという。博士論文だけに、同時代の医学や看護関係の一次資料を丹念に精査し、先行研究についても詳細な再吟味を行っていて、重厚な本格的学術書となっている。

坂田薫子『脇役たちの言い分——ジェイン・オースティンの小説を読む』（音羽書房鶴見書店、2014.7）は、オースティンの六作品の「脇役たち」に焦点をあてて論じている。このような研究書が出るということ自体が、オースティン研究の過剰、だぶつきを示している。著者は、「主役たちに注目していただだけでは読み落としてしまう可能性のある」側面を追求することによって、独自性を主張しようとしたのだろう。しかし、脇役ばかりに焦点をあてていては、作品の本質から外れてしまう。本書で、タイトルとは裏腹に、主要人物の検討がかなりの部分を占めるのは、予想された結果だ。三章分を割り当てている『マンスフィールド・パーク』論と二章分を割り当てている『エマ』論で、議論はそれぞれのヒロインに収斂する。

吉岡栄一『ジョージ・オーウェルと現代——政治作家の軌跡』（彩流社、2014.10）を読むと、現代作家だと思っていたオーウェルと「現代」との間の距離がかなり拡大していることに気づかされた。死後60年以上も経ているのだから、それも当然。しかし、その距離は時間的なものでしかない。いうまでもないが、この作家の二一世紀的意義、とくにその「政治的」意義は、むしろますます大きくなっている。

コンラッド研究者の松村敏彦氏による『ジウゼフ・コンラッド研究——比較文学的アプローチ』（大阪教育図書、2014.10）の力点は、比較文学の方にある。第一部では、ハーンと宮崎駿が主として論じられ、第二部では、村上春樹とオルハン・パムクという、一見してコンラッドからは遠いと思われる作家たちを扱う。松村氏の論考によって、コンラッド文学の深さと普遍性が浮かび上がる。

論文集としては、「戦争」をテーマとした意欲的な書籍二冊が出色であった。津久井良充・市川薫（編）『〈平和〉を探る言葉たち——二〇世紀イギリス小説にみる戦争の表象』（鷹書房弓プレス、2014.3）で、市川氏は「二度の大戦を経験した二〇世紀はまぎれもなく戦争の世紀であった」（「はじめに」）と述べている。本書は、「戦争の世紀」が

回顧と展望

文学にどのように描かれてきたのかを、イギリス小説に見られる戦争の表象を手がかりにして、たどろうとする。二〇世紀という時代と戦争は、これまでも多くの作品の中で描かれてきたし、批評でも論じられてきた。けれども、本書のように正面から「戦争の世紀」と文学を論じようとしたものは、ほとんどなかったのではないだろうか。ここではコンラッド、ロレンス、ウルフなどの主要作家に加えて、二〇世紀イギリス小説研究で不当に軽視されてきた作家たちも論じられている。巻頭にある巽孝之氏のアーサー・C・クラーク論と第九章の岩井学氏のJ・G・バラード論がそれである。クラークとバラードという歴史的にきわめて重要な位置を占めるべき作家たちに、正当な扱いを与えているというだけでも、本書の価値はある。

もう一冊は、福田敬子・伊達直之・麻生えりか(編)『戦争・文学・表象——試される英語圏作家たち』(音羽書房鶴見書店, 2015.2)。前掲書と異なる特色は、一八世紀から二〇世紀に至る歴史とイギリスに限らない英語圏文学全体を範囲とするところ。「英語圏文学研究会」のメンバーが執筆している。この研究会は、「イギリス、アメリカ、あるいはアイルランド、カナダ、オーストラリアなどの英語圏文学に携わる研究者が、国境や時代を越えて刺激しあえる環境作り」をめざして、2005年に発足した。研究者がイギリス文学だとかアメリカ文学だとか、縄張り意識を持っていては、英語圏文学を、ましてや「文学」そのものの本質を論じることはできない。本書の企図するところに大いに共感を抱きつつ緋いた。ウォルター・スコットからカズオ・イシグロに至るまで、多彩な英語圏作家が取り上げられ、国境と時代を越えた議論が展開されている。「英語圏」というにしては、全体としてイギリス文学に偏っている感があるのが惜しまれるところだが、この研究会の活動の新たな成果を待ちたい。

富樫剛(編)『名誉革命とイギリス文学——新しい言説空間の誕生』(春風社, 2014.8)は、名誉革命前後の時代、さらに小説という新しいジャンルが誕生する一八世紀前半の時代の社会、経済、政治の変動と「新しい言説空間の誕生」を論じている。この時期に生じていた深く巨大な、しかし明確に視認しがたい「革命」に切り込もうとする研究は、少なくともイギリス文学の領域では、乏しかった。それは、あいまいであるものが「常識」扱いされ、明白なものとして、先入観に支配されてきたためだろう。本書はそのあいまいな常識を覆し、新たな展望を切り開く、画期的な論文集である。とくに、イギリス史学者である坂下史^{ちかし}氏の論文「名誉革命史と「言説空間」の位置——政治、文学、公共圏」は、「新しい言説空間」誕生の歴史的背景を解き明かしたもので、大いに蒙を啓かせられる。武田将明氏の「名誉革命とフィクションの言説空間——デフォー作品における神意の事後性」は、イギリス小説というジャンルの本質に迫っていて、筆者にとっては、G. A. Starrの*Defoe and Casuistry* (1971)以来、最も刺激的なデフォー論であった。

海老根宏・高橋和久(編)『一九世紀「英国」小説の展開』(松柏社, 2014.6)のタイ

イギリス小説と批評の研究

トルを見ると、「またか」という感想が浮かんでしまう。しかし、待てよ、よく見ると「英国」とカッコ付きになっているのではないか。これは明らかに、一九世紀イギリス小説の、昔とは違う捉え方が基盤にあることを指し示すものだ。実際、ウォルター・スコット『ウェイヴァリー』を論じる高橋和久氏の論文から始まって、最終章の山田美穂子氏のコナン・ドイル論に至るまで、全ての論文の背景に「英国」あるいは「イングリッシュネス」についての現代的意識があることが確認される。一九世紀イギリス小説研究は、この論集の著者たちの覚醒された意識によって、新たに問い直され、再生されているのだ。

個人的に楽しめたのは、東雅夫・下楠昌哉(編)『幻想と怪奇の英文学』(春風社, 2014.4)。東氏の「前口上」によれば、本書の淵源は、1970年刊行の『怪奇幻想の文学IV—恐怖の探求』(新人物往来社)である。SFやファンタジーにのめりこんでいた、わが学生時代を、はからずも回想することになった。この頃、1970年代には、早川書房の『世界SF全集』や国書刊行会の『世界幻想文学大系』などが続々と刊行されて、筆者はそれらを読みふけたものだった。二一世紀の今になって、怪奇幻想文学に特化した英文学の論考集を企画したことに、同好の士として、共感をいさぐ。内容もなかなか充実している。論考のそれぞれに出来不出来があるのはいたしかたないが、全体としては、この種の文学が好きな(筆者のような)人間は、十分に楽しめる。

木村正俊(編)『アイルランド文学—その伝統と遺産』(開文社出版, 2014.6)は、アイルランド文学の全体を紹介しようという、実に野心的な書物。序章、第一章から第二九章まで、さらに地図、参考文献、年表、索引が付いて、約700ページに及ぶ。「あとがき」によれば、本書の特徴としては、「アイルランド語文学の重要性を強く意識し、前面に押し出すこと」を編集方針としたことだという。その意欲は、第二章「一七世紀アイルランド語詩」をはじめとして、とくに詩の方面で感じられる。小説では、スウィフト、エッジワース、ジョイス、ボウエンなどが取り上げられ、アイルランド文学史の中での、その位置づけが問い直されている。とはいっても、これらの作家の小説を論じる際には、「アイルランド」は常に不可避の前提であったのだから、新しい知見がえられることが多いというわけではない。全体として、本書は多彩なアイルランド文学のほぼ全体を網羅する参考資料として有用だろう。

山本史郎・南井正廣・三宅敦子・高桑晴子『近現代イギリス小説と「所有」』(英宝社, 2014.8)は、日本英文学会でのシンポジウムから派生した論文集。四人のメンバーがそれぞれ論文をまとめ、さらに最後に「シンポジオン」があって、相互に対話が行われ、あたかもシンポジウムを体験しているかのような構成になっている。タイトルが、山本氏と南井氏が自らも感じたように、いささか「突飛な」(「まえがき」, 「あとがき」)感じがするが、考えてみれば、さまざまな意味での「所有」が、近代資本主義の発展と共に勃興してきたイギリス小説というジャンルに深く関わるものであるこ

回顧と展望

とは自明のはずだった、と思いがた。

日本ジョンソン協会(編)『十八世紀イギリス文学研究[第5号]——共鳴する言葉と世界』(開拓社, 2014.7)は、日本ジョンソン協会が、4年に1回、書籍の形で出版する論文集。第一部「ミューズたちの饗宴」、第二部「異郷への憧憬」、第三部「言葉に出会う旅」の三部構成で、計15篇の論文が掲載されている。英文のシノプシスが付いているが、これほど専門的、学術的内容の書物であれば、全文を英文にしなければ出版の意義は薄いのではないか。内容は玉石混淆というのではなく、一定水準を越えているものばかり。

日本大学イギリス小説研究会(編)『イギリス文学の悦び——原公章先生古稀記念論文集』(大阪教育図書, 2015.1)は、日本大学文理学部教授であった原公章氏の古稀を記念する論文集。原氏の特別寄稿「ジョージ・エリオットとジョージ・ヘンリー・ルイス——*Problems of Life and Mind* IV, VにおけるFeelingとDuty」以下、16篇の論文が収められている。扱われている作家、作品は、原氏の専門領域であるヴィクトリア朝小説を中心として、オースティンからトニ・モリスンの『ピラヴド』まで、多彩である。

上野和子・大東俊一・塚田英博・丹羽正子(編)『ヴィクトリア朝文化の諸相』(彩流社, 2014.8)は、英米文化学会ヴィクトリア朝文化研究分科会の会員による論文集。ヴィクトリア朝の文学、思想、文化に関する10篇の論考が収められている。

福士航・服部典之・岩田美喜・小林亜希『フィクションのポリティクス』(英宝社, 2015.3)は、アフラ・ペインからゴールディングに至るまでのフィクション論を収めた論文集。服部氏と岩田氏の論考が手堅いが、気鋭の若手にも研鑽の成果がうかがえる。

文学部ないし英文科の学生を対象とした入門書が、2014年度にも二冊出版された。このうち木谷巖(編)『文学理論をひらく』(北樹出版, 2014.10)は、文学を学ぼうとする学部学生向けの文学理論入門書。タイトルの「ひらく」には啓蒙の意味もこめられている。しかし、この本を読むためには、かなり高いレベルの知的好奇心と能力が必要とされるだろう。アニメ映画『風立ちぬ』から始まるのはいいとしても、ヘンリー・ジェイムズ、野上彌生子、『ハック・フィン』、ポール・ド・マン、『三四郎』、シェリーに至るまで、めくるめくような縦横無尽の論考に、学部学生がどれだけついていけるのか、かなり疑問。しかし、その疑問を考えると、そもそも「文学」に興味を持って大学に入ってくる学生がどれだけいるのか、文学部あるいはリベラル・アーツを標榜する大学の組織がいつまで存続しうるのか、存続させるにはどうすればよいのか、という深刻な問題に突き当たってしまう。「文学部の危機」は、文化全体の、いや文明全体の危機として眼前に迫っている。批評=危機、機=機会と捉え、「批評の臨界=危機こそ批評のチャンスでもあると考えられる、希望に満ちた思考が今こそ求められている」と本書の「危機と批評: 文学研究のクリティカル・モメント」では述べ

イギリス小説と批評の研究

られている。まことにその通りだが、現代の学生たちに、「個々人のさまざまな批評意識に基づいた味読＝精読のアプローチによって新たな読み方を発見」して、文学研究の醍醐味を体験することを求めても、それはどれほど可能なのだろうか。本書の五人の著者たち（木谷氏のほか、小川公代、生駒久美、霜鳥慶邦、高村峰生の四氏）のように、意欲に溢れ才能に恵まれた若手研究者たちがいることが、この疑問に対する答えであり、未来の希望であると信じたい。

石塚久郎（編）『イギリス文学入門』（三修社，2014.6）は、「21世紀に入って編まれた、日本語による初の本格的イギリス文学入門」だとのこと。しばらく前に出た下楠昌哉（編）『イギリス文化入門』（三修社，2010）の姉妹編らしい。古・中英語文学から現代までが網羅され、それぞれ「歴史」、「文学史のアウトライン」、「代表作家」という構成の第1部「イギリス文学の歴史」と「イギリス文学の重要テーマ」15項目を解説する第2部、さらに「巻末資料」という組み立て。見開き2ページで紹介される「代表作家」は120人。二一世紀の本にふさわしく、現代作家分が充実している。印象的なのは執筆陣が実力派揃いだということ。すでにベテランの域にある者も含め、いわゆる中堅どころとか新進気鋭とか形容される人々など、我が国のイギリス文学研究の屋台骨を支え、これから支えていく研究者たちの名前がずらりと並び、壮観である。記述の内容も密度が濃く、レベルが高い。初学者は消化不良になるだろう。

（東京女子大学教授）